

## 編集後記

今年は、『木簡研究』が大会までに行けるだろうか。一度くずれたら、もう二度と大会にまにあわせることはできないのではないのか。編集担当の幹事と、この厄介な出版物を引きうけてくれている出版社の社員とが、毎年かわしあうこの種の話合いも、もう十年をこえてしまった。いつかは大会に間に合わなくなるのではないかと思いつながら、一方では、多分今年もなんとか滑り込むのではないかと言う内心の気持とが奇妙に交錯するようになると、秋も深まっていて、山川の景色も見頃になり、各種の学会の開催も盛んになるし、博物館、美術館は競って特別展を開くことになる。

一秋ぐらいいは、一度、学会と博物館と観光の秋に浸ってみたいものである。まあ、ぐちはいうまい。『木簡研究』という機関誌は、原稿を執筆して下さった全国各地の方々が、多忙をきわめた発掘現場の仕事の合間をぬって作成していただいたことがまず第一の前提条件でなりたっている。編集雑務はそれに比べたいしたことではない。また、幹事達が真赤になおした再校や再々校のゲラを組み直して下さる印刷工場の人達にしてみれば、これほど迷惑な仕事もあるまい。

ともかく、やっている内に本ができあがると、やっぱり努力した

甲斐はあったと思うのは人情であるが、同時に、あそこはこう直せばよかったなと正月になってから思うのも人情というものかも知れない。

それはともかく、今年もまた全国各地の発掘現場から三十数本の原稿をいただき、また、中国の保存科学の新しい動向をまとめた胡繼高氏の論文、考古学から小池伸彦氏、日本史からは大山誠一氏、国語学からは大銅隆氏の論考をいただくことができた。執筆者の方々に深甚の謝意を表わしたい。

木簡の発見でマスコミなどの木簡のとりあげ方も華やかになったが、所詮、木簡の研究などは地味で下積み基礎となる研究が中心にならざるを得ない。

期日に間に合わせることにとやかく煩うよりは、『木簡研究』が少しでも着実な木簡の研究と資料収集と公開とに役立つとすれば、編集担当一同のささやかな喜びではある。

(鬼頭清明)